貝塚市埋蔵文化財調査報告 第29集

貝塚市遺跡群発掘調査概要15

1993・3

貝塚市教育委員会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈とに接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。その自然環境の良さから、市内にはわたくしたちの先人が残した数多くの遺跡があります。

これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、後世に伝えるために保護を講じることは、現在に生きるわたくしたちに与えられた義務であります。しかし、近年の都市化の波による各種開発はこれらを破壊の危機にさらしています。

今回の調査もこうした開発行為に伴う事前調査でありますが、幾多の成果を得ることができましたのでここに平成4年度中に実施しました市内埋蔵文化財緊急発掘調査の一部を報告いたします。本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、地元の方々をはじめ関係者各位には多大なご理解ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表す次第であります。

貝塚市教育委員会

教育長　福井昱彦

例　　言

1．本書は貝塚市教育委員会が平成４年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査結果のうち、石才南遺跡、貝塚寺内町遺跡、土生遺跡の発掘調査にかかる結果の概要報告である。

2．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員前川　浩一、三浦　基、上野　裕子が担当し、平成４年４月13日より調査を実施し、翌５年３月31日に終了した。

　また、現地調査および本書作成にあたる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

石橋　孝子　　澤村　香織　　清水　久子　　下中理絵子　　高野　洋一
田渕　広巳　　辻　栄子　　辻ノさとみ　　中辻　澄子　　橋本　淳
南　明美　　森川　祐子　　山本　寿子

3．本書の作成にかかる編集は前川が担当し、執筆は目次に示したとおり、前川、三浦が担当した。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次

Ⅰ．　石才南遺跡の調査（前川）
1．位置と環境 …… 1
2．調査の概要 …… 1
3．検出遺構 …… 2
4．出土遺物 …… 3
5．まとめ …… 4

Ⅱ．　貝塚寺内町遺跡の調査（三浦）
1．位置と環境 …… 5
2．調査の概要 …… 5
3．検出遺構 …… 6
4．出土遺物 …… 7
5．まとめ …… 7

Ⅲ．土生遺跡の調査（三浦）
1．位置と環境 …… 8
2．調査の概要 …… 8
3．検出遺構 …… 9
4．出土遺物 …… 13
5．まとめ …… 14

図 版 目 次

図版１　石才南遺跡
　１．調査区全景
　２．同　　上
図版２　石才南遺跡
　１．遺構完掘状況
　２．同　　上
図版３　石才南遺跡
　１．遺構完掘状況
　２．ＳＫ－１土層状況
図版４　貝塚寺内町遺跡
　１．調査区全景（第１区）
　２．遺構検出状況（第１区）
図版５　貝塚寺内町遺跡
　１．遺構検出状況
　２．土層堆積状況
図版６　土生遺跡
　１．ＳＤ－１完掘状況（第１区）
　２．ＳＤ－１断面状況
図版７　土生遺跡
　１．調査区全景（第２区）
　２．同　　上
図版８　土生遺跡
　１．遺構検出状況（第２区）
　２．同　　上
図版９　土生遺跡
　　第１区出土遺物

挿　図　目　次

図 1　　貝塚市遺跡分布図

図 2　　石才南遺跡調査位置図

図 3　　調査地概略図

図 4　　貝塚寺内町遺跡調査位置図

図 5　　調査地概略図

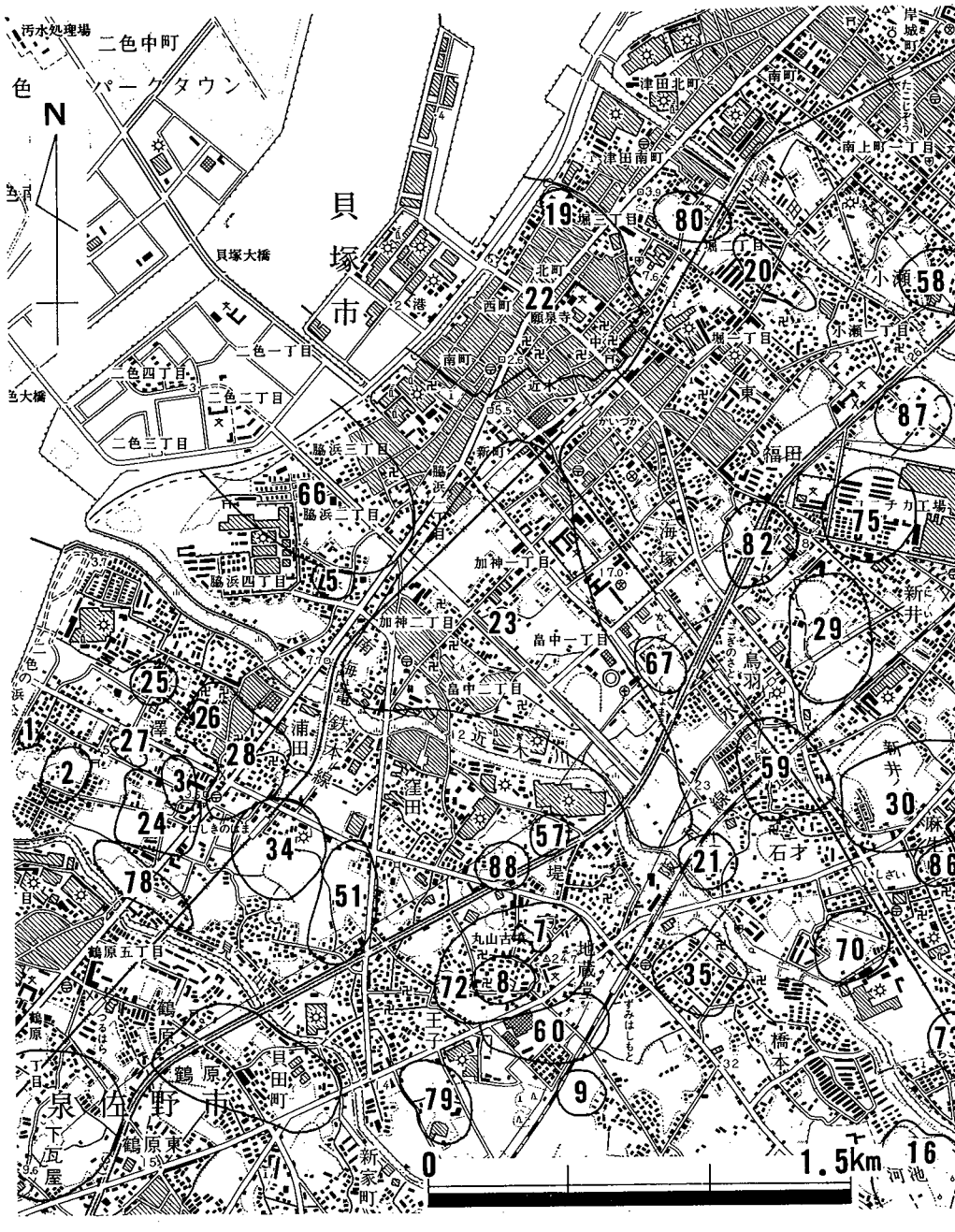
図 6　　土生遺跡調査位置図

図 7　　調査地概略図

図 8　　第 1 区出土遺物

図 9　　第 1 区出土遺物

図10　　第 1 区出土遺物



1. 沢新田遺跡 2. 沢海岸遺跡 3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 丸山古墳 8. 地蔵堂廃寺跡 9. 下新出遺跡 16. 河池遺跡 19. 泉州麻生塩壺出土地 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡 23. 加治神前畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢城跡 29. 新井鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 34. 澱池遺跡 35. 積善寺城跡 51. 窪田遺跡 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡 72. 地蔵堂遺跡 73. 名越西遺跡 75. 新井鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 80. 津田遺跡 82. 福田遺跡 86. 麻生中出口遺跡 87. 小瀬遺跡 88. 堤三宅遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

Ⅰ．石才南遺跡の調査

1．位置と環境　（図2）

石才南遺跡は、貝塚市をほぼ縦断して流れる近木川右岸の段丘上に位置する。海抜約30 mを測る地点、東西300 m、南北250 mの範囲に広がる弥生時代から中世にかけての集落跡である。

府道貝塚中央線建設に伴って、㈶大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施し、弥生時代の大型集落や古墳時代の墓域等を検出している。また、それに伴う多くの遺物が出土している。

今回の調査は、先の道路建設に伴う事前発掘調査において、特に弥生時代から古墳時代の遺構を多数検出した地区の東側の地点にあたり、貝塚市麻生中459－2である。したがって、先の調査に続く遺構等を検出することが期待される調査であった。

2．調査の概要　（図3）

調査は開発計画に基づいて、敷地西側部分に東西約2 m、南北約5.5 m、面積約11㎡の調査区を設定し調査を実施していった。

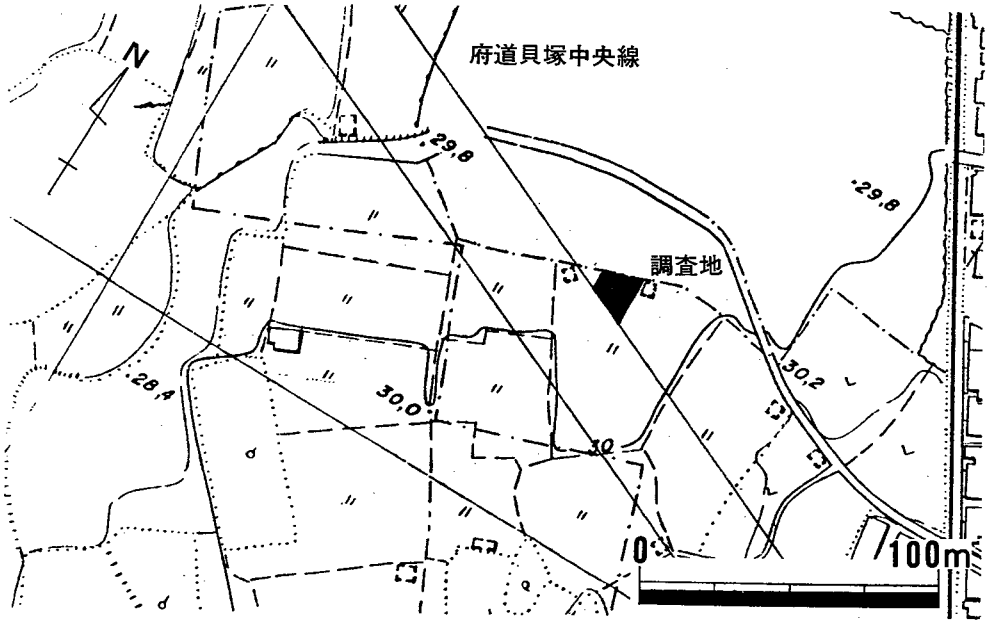


図2　石才南遺跡調査位置図

調査地区はすでに耕作土が除去されており、多小盛土が施されている。したがって、基本層序としては、厚さ約20cmを測る盛土、その下に厚さ約6cmを測る暗茶色土が堆積し、その下が地山となる。暗茶色土は床土化しているが後世に掘削、移動を受けた痕跡は認められない。また、地山は調査区の南、北端が淡茶色礫、中央部分が黄色粘土となっている。地山面は高低差がほとんどなく、フラットである。

遺構はすべて地山面にて検出している。

3．検出遺構　（図3、図版1～3）

調査では地山面において、土坑2、柱穴9を検出した。埋土は3種に分類でき、同一埋土の遺構は割合近い位置に存在している。

以下、遺構毎に概要を示す。

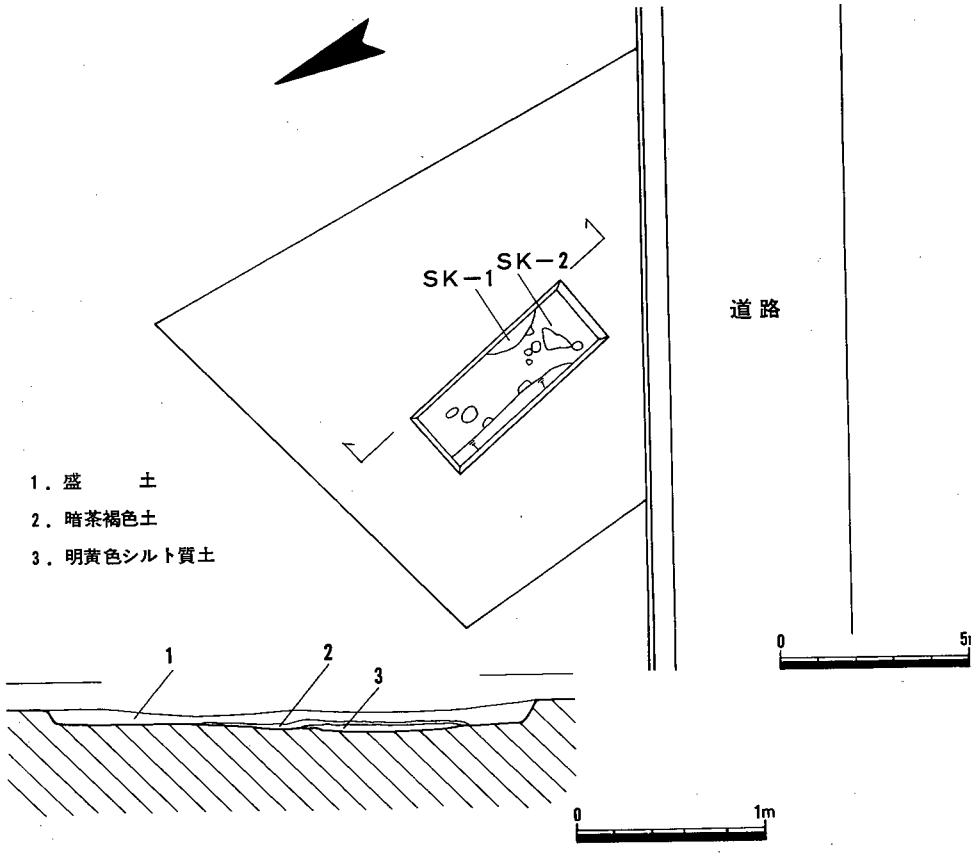


図3　調査地概略図

ＳＫ－１

本遺構は調査区南部で検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、長軸約1.7m、短軸約40cm、深さ約６cmを測る。埋土は焼土混りの明黄色シルトであり、断面は薄いレンズ状を呈す。本土坑と同一埋土をもつものはない。遺物は弥生土器細片、サヌカイト細片が出土している。

ＳＫ－２

本遺構は調査区南部、ＳＫ－１のすぐ西で検出した土坑である。長軸約90cm、短軸約50cm、深さ約18cmを測る。埋土は暗茶褐色土であり、断面はレンズ状を呈す。本土坑と同一埋土をもつものは、調査区北部の柱穴があげられる。遺物は弥生土器細片、サヌカイト細片が出土している。

柱　穴

柱穴は調査区内に点存しており、建物等の推定は不可能である。規模は直径20～40cm、深さ４～12cmを測る。埋土は暗茶褐色土と暗灰茶色土の２種類が認められる。遺物は弥生土器極細片、サヌカイト片が出土している。

土坑、柱穴共に遺構の深さが非常に浅く、埋没後いずれかの時代に大きく削平を受けたことが考えられる。

４．出土遺物

出土遺物は大部分が細片となっており、時期を明確にはできない。半数以上の遺構からは弥生土器が出土し、一部の遺構からは合せてサヌカイト片が出土している。須恵器等後の時代の遺物は含まれない。包含層からは弥生土器、サヌカイト片が出土し、１点土師質の製塩土器と思われるものが含まれる。包含層からも須恵器は出土しなかった。いずれの遺物も図示に堪えるものはない。したがって、この状況からは、遺構が弥生時代、包含層が古墳時代前期頃という時期が与えられよう。

弥生土器については、前期的な造りの厚手のものもなく、また、タタキ等も確認できない。不明確ではあるが、クシガキ文らしきものが数点含まれることから、中期頃のものであることが推定できるのみである。

いずれにしても、時期を確定できる遺物に欠けており、推定の域は出ない。

5．まとめ

今回の調査はごく限られた面積のものであったが、一応の成果は得られたものと思われる。

本遺跡の弥生時代、古墳時代の遺構は、遺跡マーク地内の西側部分に広がっていることが㈶大阪府埋蔵文化財協会の調査や当委員会が府道西側で実施した３ケ所の調査等で明らかとなっている。府道東側の今回調査地から東へ50ｍの地点において、当委員会が実施した調査では近世の溝、土坑等を検出しており、弥生時代・古墳時代等の古い時代の遺構は府道より西にしか広がらないものと推定していた。また、近接した宅地における立会調査においても、同様な結果となっていた。

しかし、今回の調査では限られた面積の中から古い時代の遺構を多数検出したことの意義は大きい。出土遺物が細片となっているため、遺構等の詳細な時期比定は困難である等の問題点はあるものの、府道調査部分に比べると遺物包含層がほとんど残っていないこと、にもかかわらず遺構が多く存在すること、遺構面までの深さが半分以下であること等、古い時代の遺構の広がりや後の変遷などを考える上で、いくつかの手掛りは得られたと云えよう。

本市では、ほぼ全域と云っても良いほどの地域で中世の遺構等が検出できる。それに比べるとその他の時代については限られた部分でしか検出できない。古い時代については、大部分が中世に削平を受けたというように考えることも可能ではある。しかし、やはりそれだけでは問題が残る。そのような状況下における石才南遺跡の存在価値は高いと云えよう。

Ⅱ. 貝塚寺内町遺跡の調査

1.位置と環境

発掘調査を実施したのは貝塚市北部に位置する貝塚寺内町遺跡の一角である。

貝塚寺内町遺跡は、願泉寺を中心として中世から近世にかけて栄えた環豪城塞都市である。遺跡は東西約700m、南北700mの範囲で海岸部と段丘部からなり海抜は約2～10mを測る。

周辺の遺跡としては、北に近世の集落跡、散布地である堀新遺跡、東に古墳時代から中世にかけての集落跡である堀遺跡、中世～近世にかけての集落跡である津田遺跡、南には古墳時代～近世にかけての集落跡である加治神前畠中遺跡等が存在する。

今回の調査地は遺跡マーク地の中央部に位置し、海に向かって舌状にのびる段丘端部の海抜約7.5mを測る地点、貝塚市北町38－5である。

2.調査の概要

開発計画に基づき、調査地内西側に東西方向に2×5.5m、東側に1.5×1.2mの2カ所の調査区を設定し、前者を第1区、後者を第2区とした。

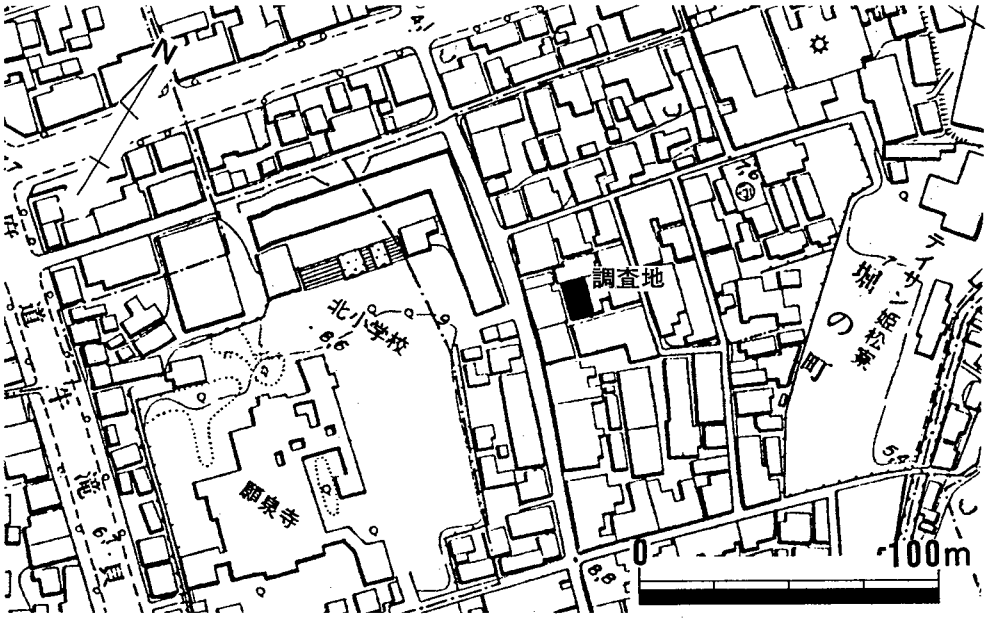


図4　貝塚寺内町遺跡調査位置図

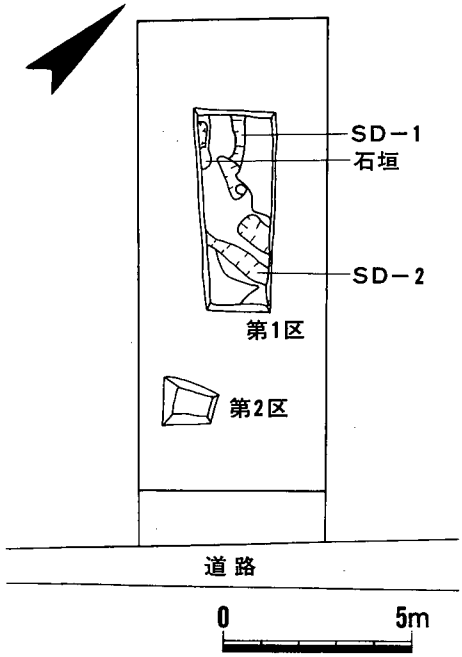


図５　調査地概略図

調査地内における基本層序は20～50cmの深さまで攪乱を受けており、その下に焼土を含む暗灰褐色土（20～30cm）が堆積し、その下に地山となる黄色粘土を検出した。攪乱は、建物の建てかえによるもので近世の遺物を含む層である。また、暗灰褐色土は近世の遺物を含む包含層である。

第１区は、地山上面にて溝２条、石垣を検出した。遺物は陶器、磁器、瓦片が攪乱、包含層から出土している。

第２区は遺構が検出されていないが、第１区と同様に包含層を検出しているが、焼土を検出していない。出土遺物は陶器、磁器、瓦等である。

３．検出遺構　（図５，図版４．５）

第１区にて検出した遺構について以下概要を示す。

ＳＤ－１

本遺構は東南部にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長２ｍ、幅約0.5ｍを測る。溝の方向は東西方向で埋土は暗黄色砂である。遺物は出土していない。

ＳＤ－２

本遺構は西側にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長1.7ｍ、幅約１ｍ、深さ約90cmを測る。溝の方向は南東－北西方向で埋土は黄色砂である。遺物は出土していない。

石垣

本遺構は西側にて検出した。直径20cm程度の石が集まった状態で検出されており石垣が攪乱を受けて壊れた状態であると考えられる。石垣の方向、規模についてはよくわからない。

4.出土遺物

本調査において遺構からの遺物の出土は認められなかった。出土遺物は攪乱からの出土したものとのその下の暗灰褐色土からの出土がほとんどである。攪乱からは陶器、磁器、瓦片が出土している。また、暗灰褐色土からは磁器、瓦片を出土している。瓦片は火を受けていると考えられるものが出土している。

遺物の器種は碗が最も多く、甕、皿、徳利といったのも出土している。

遺物の時期は近世終わりごろのものが中心であると考えられる。この遺物を含む攪乱層の性格についてであるが、宅地として利用されてきた土地であるため建物の建替えや火災等によって攪乱を受けたものであると考えられる。

5.まとめ

今回の調査では溝、石垣等の遺構が検出されたことは、一応の成果が得られたといえる。

遺構の性格については出土遺物もなく時期についても決定が難しいが溝については寺内町成立以前の遺構の可能性がある。

また、本調査地は、現在でも古い町並みの残る家の密集する場所であり、何度も建替えが行われたことが考えられる。今回の調査において建物に関係する遺構は、石垣と考えられる遺構が検出されているものの確認できなかった。その理由として考えられることは建物が礎石を使用するものであるため遺構として残ってこないこと、また建替えに伴って若干の整地によって現状の地表面が攪乱されるためと考えられる。

本調査地は貝塚寺内町の中心である願泉寺本堂より直線距離にして約100 mというところにあり、また同一段丘上に位置しているため何らかの関係が予想されるとともに寺内町以前の遺構の存在も期待されたが、残念ながら検出には至らなかった。

従前の立会調査によりほぼ全域で近世の遺物が出土しており包含層の存在が確認されている。しかし、寺内町のそれぞれの地区にどのような人々が住みどのような生活をしていたのかまだまだ不明な点が多く絵図や文献史料の研究とともに発掘調査による資料の増加に期待するとともに考古学的な観点でのアプローチも積極的に行って行く必要がある。

Ⅲ. 土生遺跡の調査

1.位置と環境（図6）

調査を実施したのは貝塚市北部の岸和田市との境界に位置する土生遺跡の一角である。

土生遺跡は、貝塚市の北部を流れる津田川の右岸標高約15mを測る中位段丘上に位置する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である。岸和田市側に遺跡の中心があると考えられており本市においての遺跡の範囲は東西約400 m、南北約100 mの範囲がマークされている。弥生時代の遺物が数多く出土している地域である。

周辺に散在する遺跡としては、西に中世の集落跡である小瀬御所山遺跡、南には中世の集落跡である新井鳥羽北遺跡、平安時代から近世にかけての集落跡である小瀬遺跡等が存在する。

今回の調査地は遺跡マーク地の中央部にあたる標高15mを測る地点、久保508である。

2.調査の概要（図7）

開発計画に基づき、調査地内西側に東西方向に1.5×1.2 m、東側に2×7.5 mの2カ所の調査区を設定し、前者を1区、後者を2区とした。以下、概要を示す。

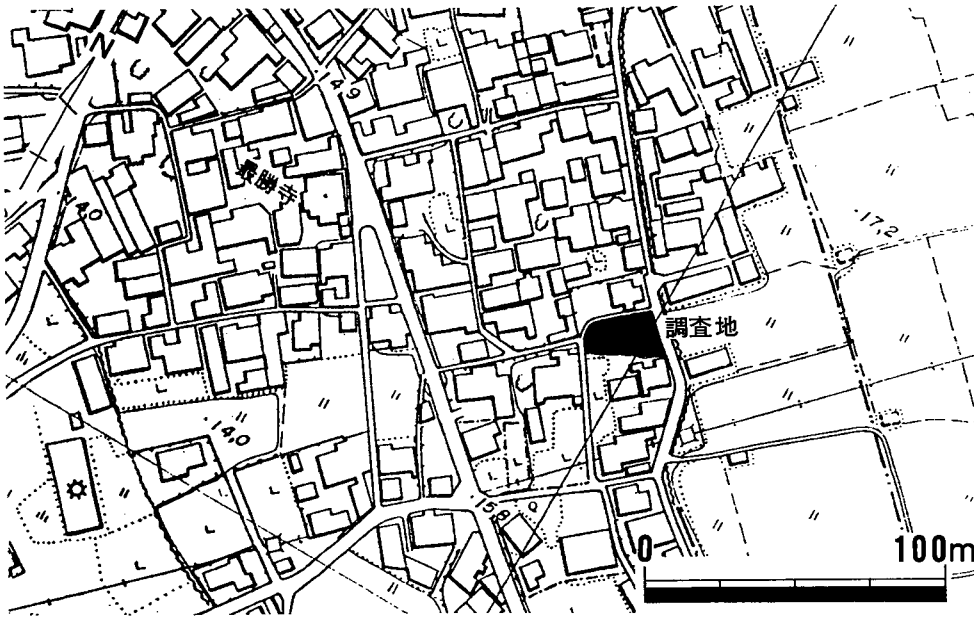


図6　土生遺跡調査位置図

第１区

層序は、盛土（約30 ㎝）、明黄茶色粘質土（約10 ㎝）、暗黄茶色粘質土（約10 ㎝）の下にＳＤ－１の埋土である黒褐色粘土（20～30㎝）が堆積し、その下に、層厚約10㎝を測る暗灰色系の砂が堆積する。地山は暗黄色シルトである。検出遺構は、溝１条を検出している出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、石器等である。

第２区

層序は、攪乱（約40㎝）の下に層厚約10㎝を測る灰色系の土、層厚約20㎝測る茶灰色系の粗砂が堆積し、その下は遺構が検出される地山（黄色粘土、暗褐色粗砂）がある。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、石器等である。

第１区・２区ともに盛土、攪乱を除く層はすべて包含層である。出土遺物は弥生土器を中心としており中世、近世の遺物はあまり出土していない。

調査地周辺の地形は北側、西側、南西方向（津田川）方向に向かってゆるやかに傾斜しており溝の方向もこれに準じていると考えられる。

３.検出遺構（図７，図版７.８）

第１区・第２区ともに遺構を検出した。以下概略を示す。

ＳＤ－１

本遺構は第１区にて検出した溝である。調査区外に広がるため規模は不明であるが東側

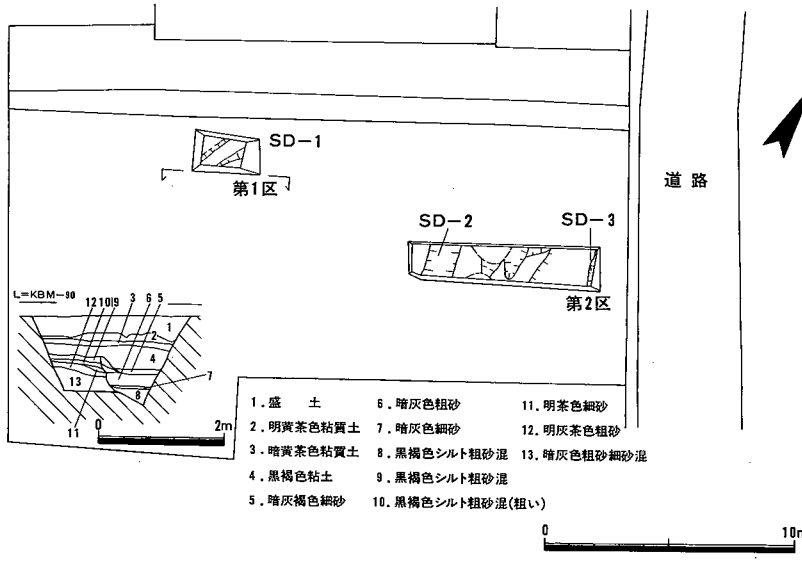


図７　調査地概略図

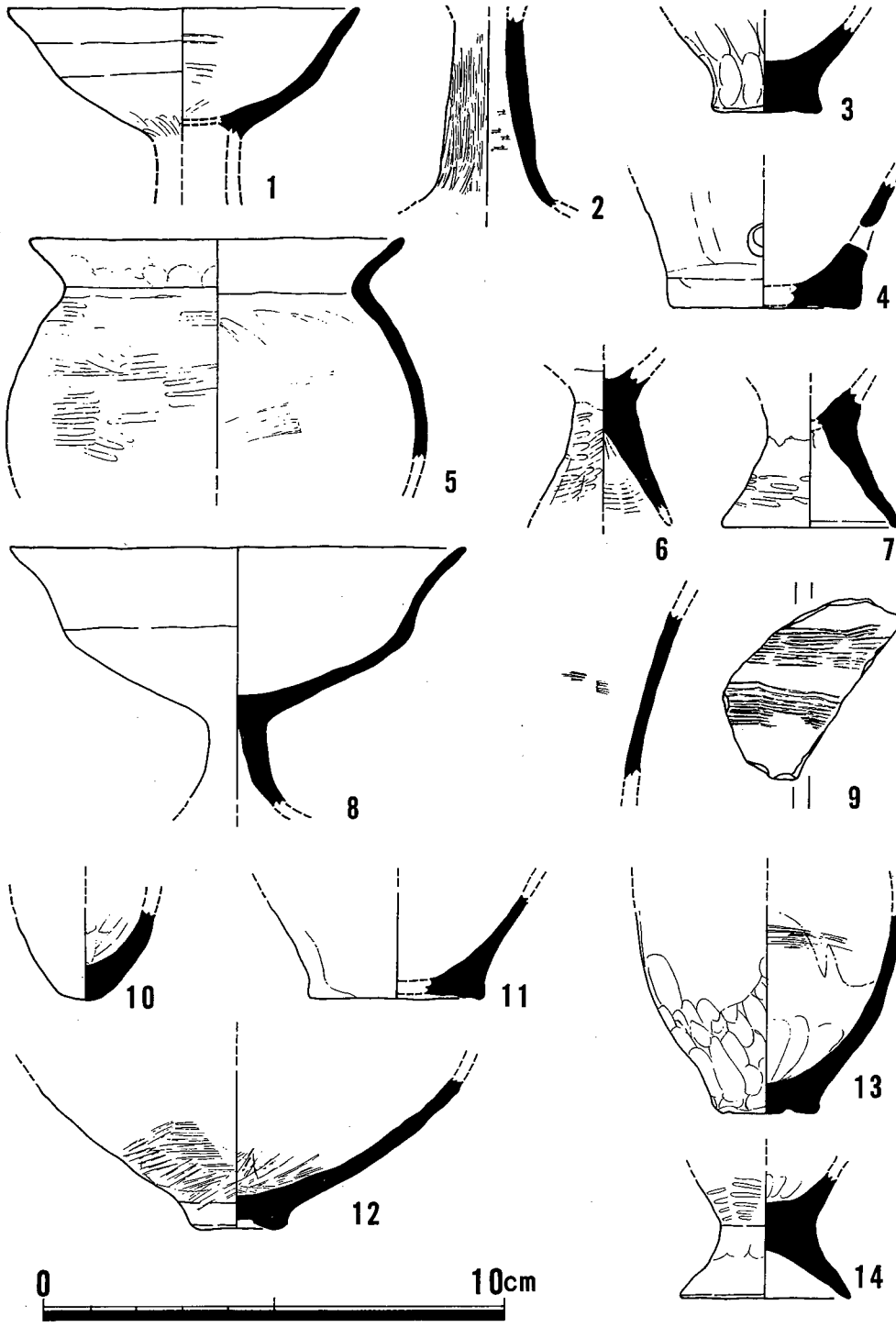


図8　第1区 出土遺物

のカタを確認している。

溝の層序は、現在の地表面より約0.5ｍで溝上面を検出し、層厚20～30cmを測る黒褐色粘土が堆積し、その下に、層厚約10cmを測る暗灰色系の砂が、細砂・粗砂と互層をなし、

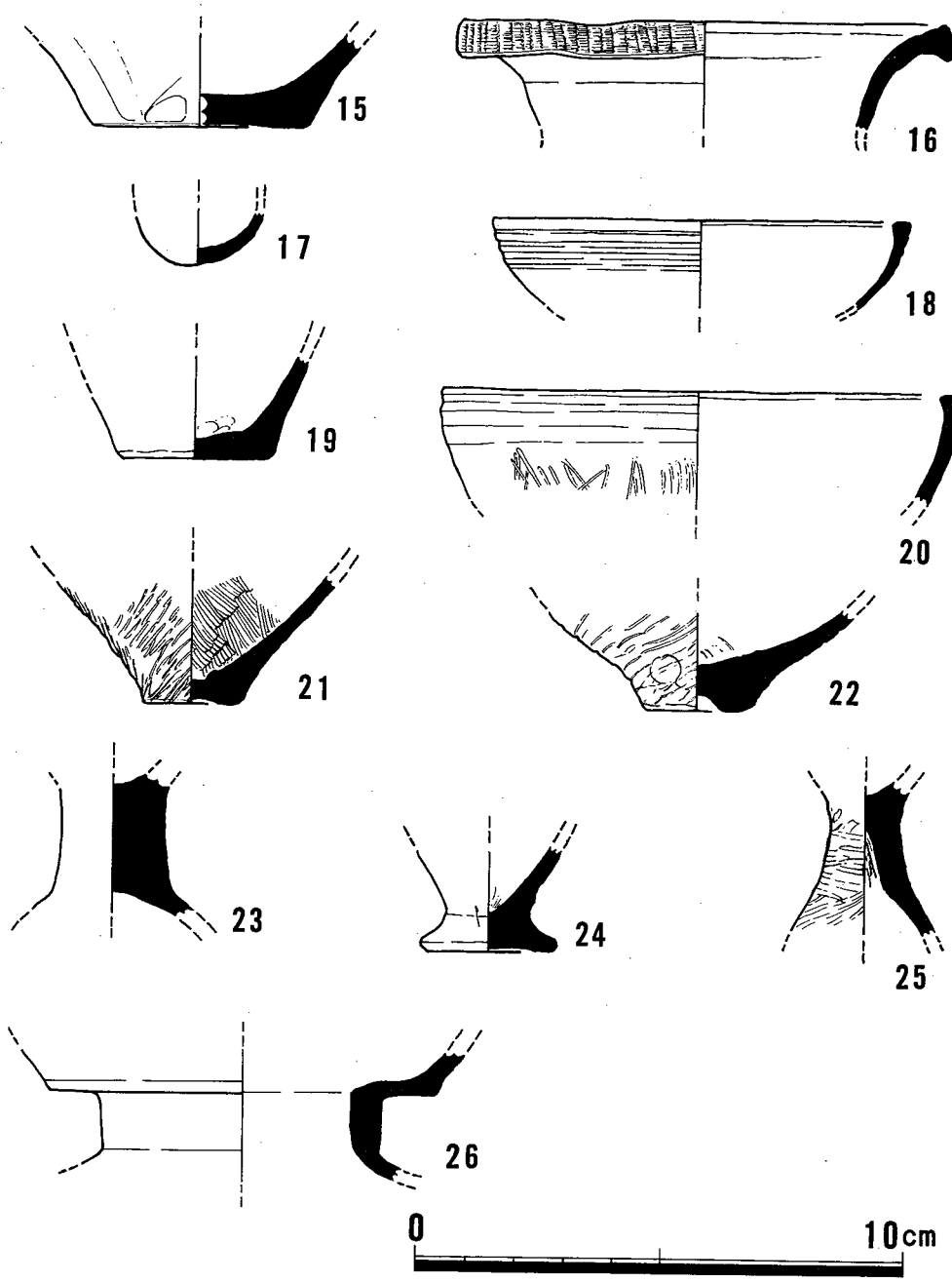


図９　第１区 出土遺物

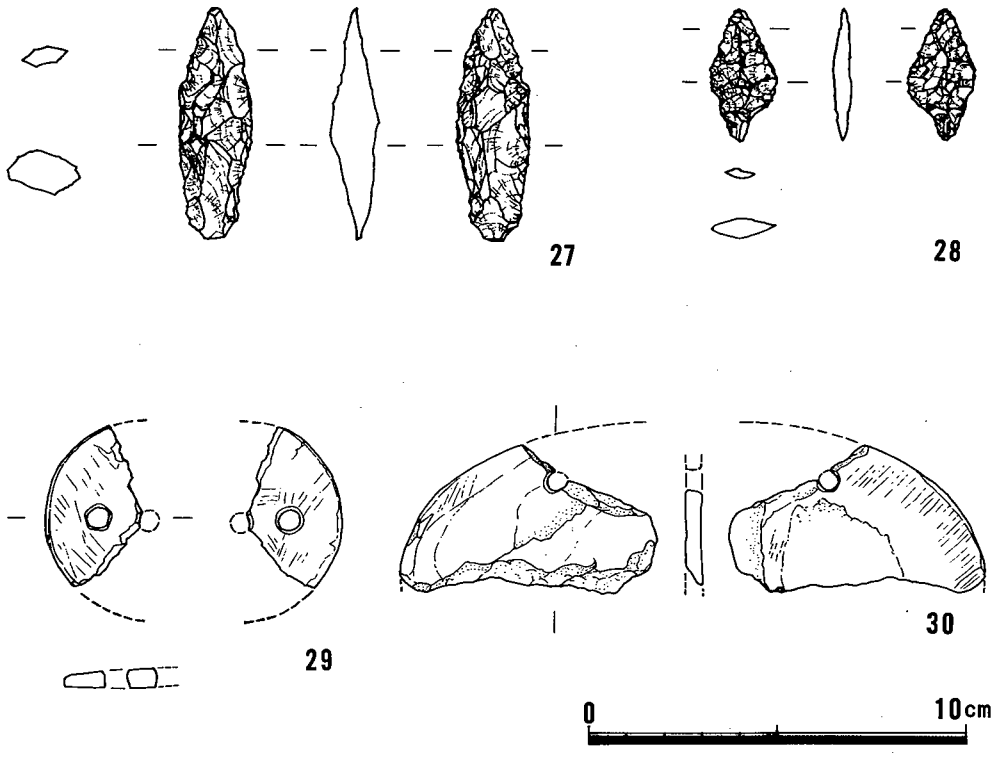


図10　第１区 出土遺物

また混じるといった堆積状況をみせる。地山は暗黄色シルトである。溝の深さは、0.9ｍを測る。調査地周辺の地形、遺構の状況から溝は北東－南西方向に流れていたと推測される。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。

ＳＤ－２

本遺構は第２区北東端にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長1.2ｍ、幅約0.2ｍ、深さ約10cmを測る。溝は南東－北西方向であると考えられ埋土は暗青灰色粗砂である。出土遺物は弥生土器片である。

ＳＤ－３

本遺構は第２区南西端にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長1.3ｍ、幅約1.2ｍ、深さ約20cmを測る。溝は南北方向であると考えられる。埋土は淡灰色粗砂（約10cm）、暗灰色土（約10cm）である。出土遺物は弥生土器、須恵器片である。

4.出土遺物（図8～10，図版9）

本調査では弥生時代、古墳時代の土器が主に出土している。量的には弥生時代の土器、石器が最も多いが土師器、須恵器が混じって出土している。以下、一番出土の多かった第1区ＳＤ－１の出土遺物について概要を示す。

1は、第5層より出土した復元口径約15cmを測る弥生土器高杯椀部片である。全体にはく離、摩滅が激しいが、脚部接合部分外面に縦位ミガキを施す。

2～4は、第6層より出土した。2は、弥生土器高杯脚部片である。外面縦位ケズリ、内面横位ケズリを施す。3は、底部径4.7cmを測る弥生土器鉢底部片である。外面に指オサエを施す。4は、復元底部径8cmを測る弥生土器甕底部片である。焼成前に穿口している。5～8・10は第7層より出土した。5は復元口経約15.9cmを測る弥生土器甕口縁部片である。頸部はくの字状を呈する。調整は外面体部にタタキ、頸部に指オサエを行い、口縁部はナデ、内面ハケメを施す。6、7は土師器製塩土器底部片である。6は外面にタタキ、内面にハケメを施す。7は復元底部径7.3cmを測る。外面にタタキを施す。8は復元口径19.6cmを測る弥生土器高杯椀部片である。内外面にナデを施し、脚部内面にしぼり目を有する。10は、弥生土器飯蛸壺底部片である。

9・11～14は第8層より出土した。9は、弥生土器壺体部片である。生駒西麓産の土器で外面に櫛描直線紋を施す。11は、復元底部径7.5cmを測る弥生土器甕底部片である。12は底部径4.1cmを測る弥生土器鉢底部片である。外面にタタキ内面にミガキを施す。
13は底部径4.6cmを測る弥生土器壺底部片である。外面体部に黒斑を有し内面にハケメを施す。14は底部径7.3cmを測る土師器製塩土器底部片である。外面にタタキを施す。

15は第10層より出土した復元底部径8.7cmを測る弥生土器壺底部片である。

16は第11層より出土した復元口径19.7cmを測る弥生土器広口壺口縁部片である。生駒西麓産の土器で口縁端部が面をなしそこに櫛描直線紋を施す。

17は包含層より出土した飯蛸壺底部片である。

18～25は第13層より出土した。

18・20は弥生土器鉢口縁部片である。18は復元口径15.8cmを測る。口縁端部に面をもち、立上がり部外面に凹線紋を施す。20は復元口径20cmを測る。口縁端部に面をもち、立上がり部外面に凹線紋、ミガキを施す。

19は復元底部径6cmを測る弥生土器壷底部片である。

21・22は弥生土器甕底部片である。21は底部径4cmを測る。外面にタタキ、内面にハケ

メを施す。22は復元底部径4.7㎝を測る。外面にタタキを施す。

23〜25は土師器製塩土器底部片である。24は底部径5㎝を測る。25は外面にタタキを施す。

26は弥生土器壺頸部片である。ほぼ直立する頸部は折曲して立ち上がる。口縁部は欠失している。

27は包含層より出土した長さ6.1㎝、最大幅1.9㎝、厚さ1.2㎝を測るサヌカイト製石鏃未製品である。28は第6層より出土した長さ3.5㎝、最大幅1.2㎝、厚さ0.4㎝を測るサヌカイト製有茎式石鏃である。

29は第6層より出土した緑色片岩製紡錘車片である。穴は2カ所残存する。30は第8層より出土した緑色片岩製石包丁である約半分が欠失している。紐孔は1個残存している。刃部は、内彎刃形態を呈し、片刃である。

5.まとめ

今回の調査では、溝3条を検出することができた。トレンチ調査による面積的な制約のため検出した遺構の広がり、性格等について不明確な点もあったが一応の成果を得た。

出土遺物は弥生土器が中心に出土しており、その時期は弥生時代中期以後のものが出土しており弥生時代後期の土器が多くを出土している。また、古墳時代前期に位置付けられる土師器の出土も認められる。石器は、石鏃、石包丁などの製品のほかに多くの剝片を出土している。

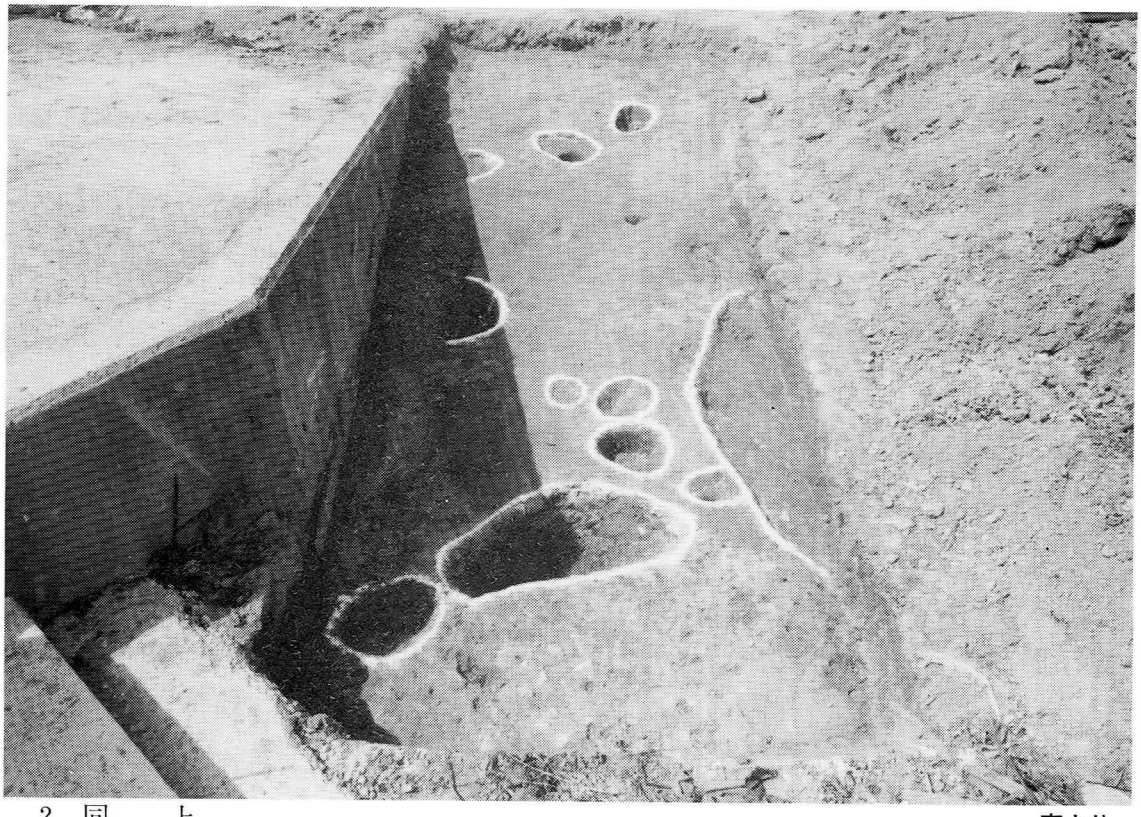
本遺跡は従前の調査により弥生時代中期の遺構を検出する成果をあげている。今回の調査により検出された溝は出土遺物から考えると弥生時代中期から古墳時代にかけての時期幅をもっている。溝以外の遺構は検出されていないが、出土遺物は比較的、摩滅等を受けておらず集落部があまり遠くでないことが想起され今後の調査により住居址等の検出される可能性も考えられる。

本遺跡における調査成果は地図上では点でしかなく面的に本遺跡を分折できる段階には至っていない状況にある。今後の調査に期待するとともに調査成果を参考に調査を進めて行きたい。

図　　版

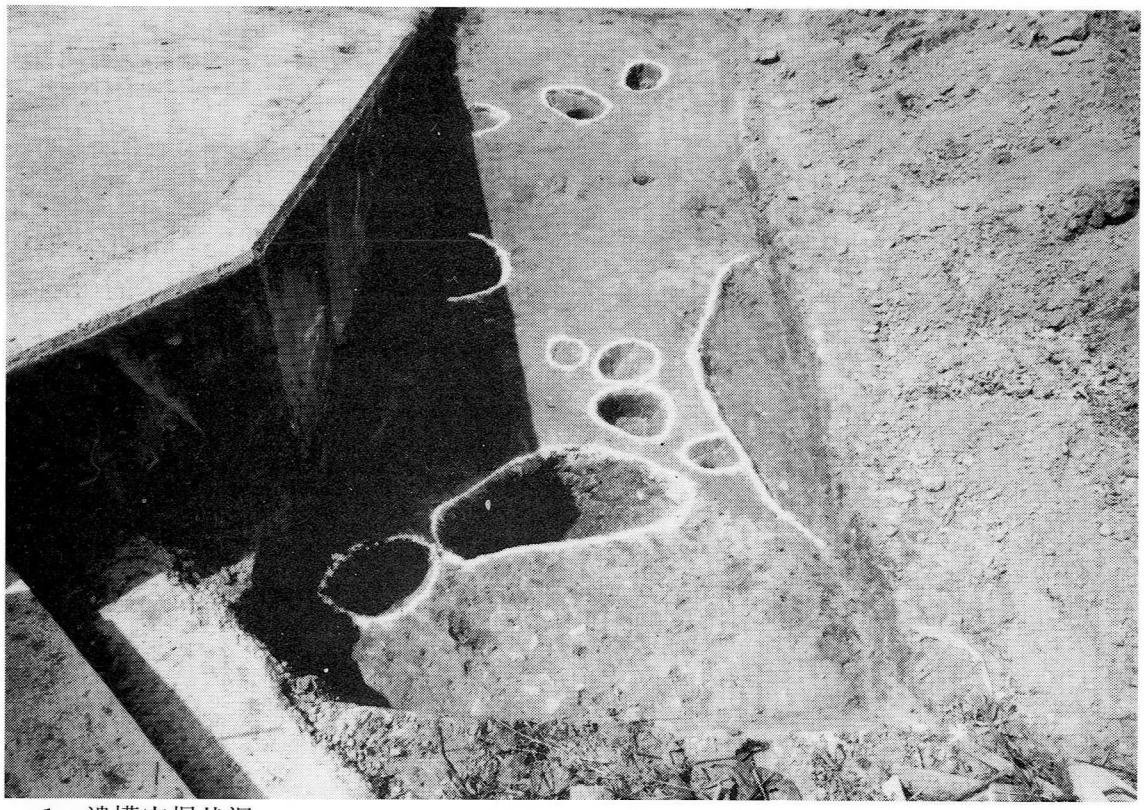
図版1　石才南遺跡

1. 調査区全景　　北より

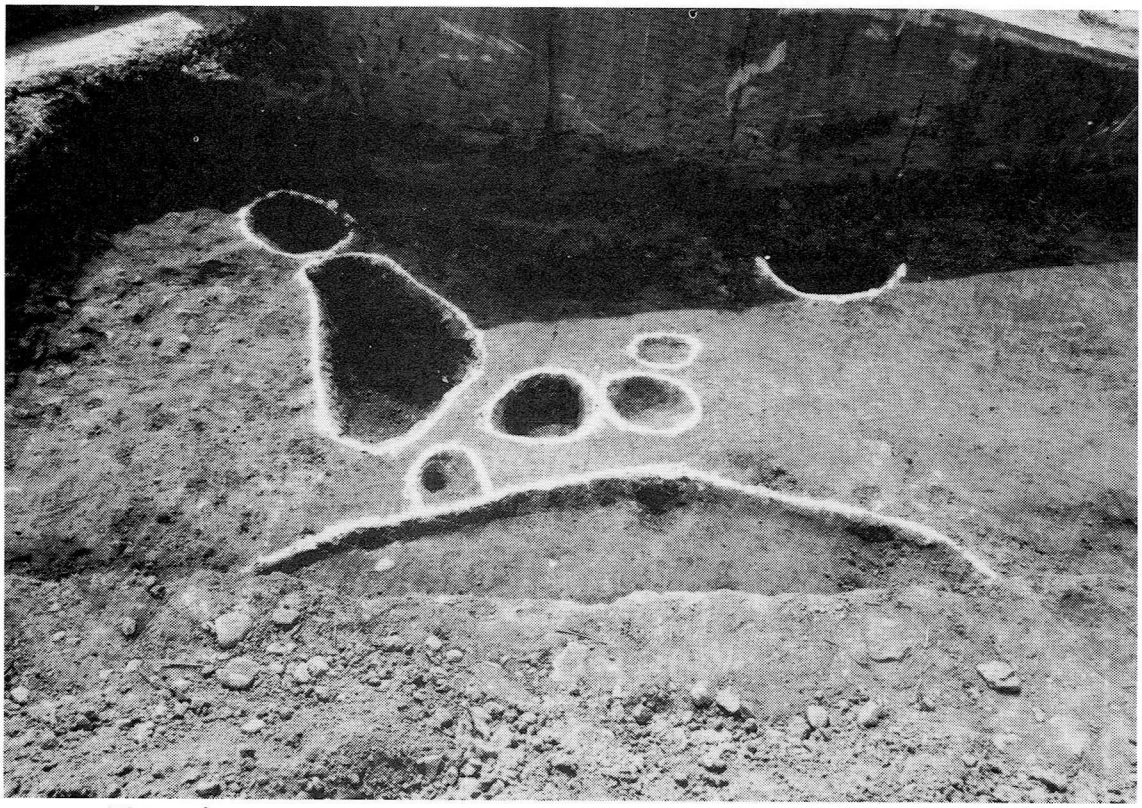


2. 同　　上　　南より

図版2　石才南遺跡



1. 遺構完掘状況　　南より



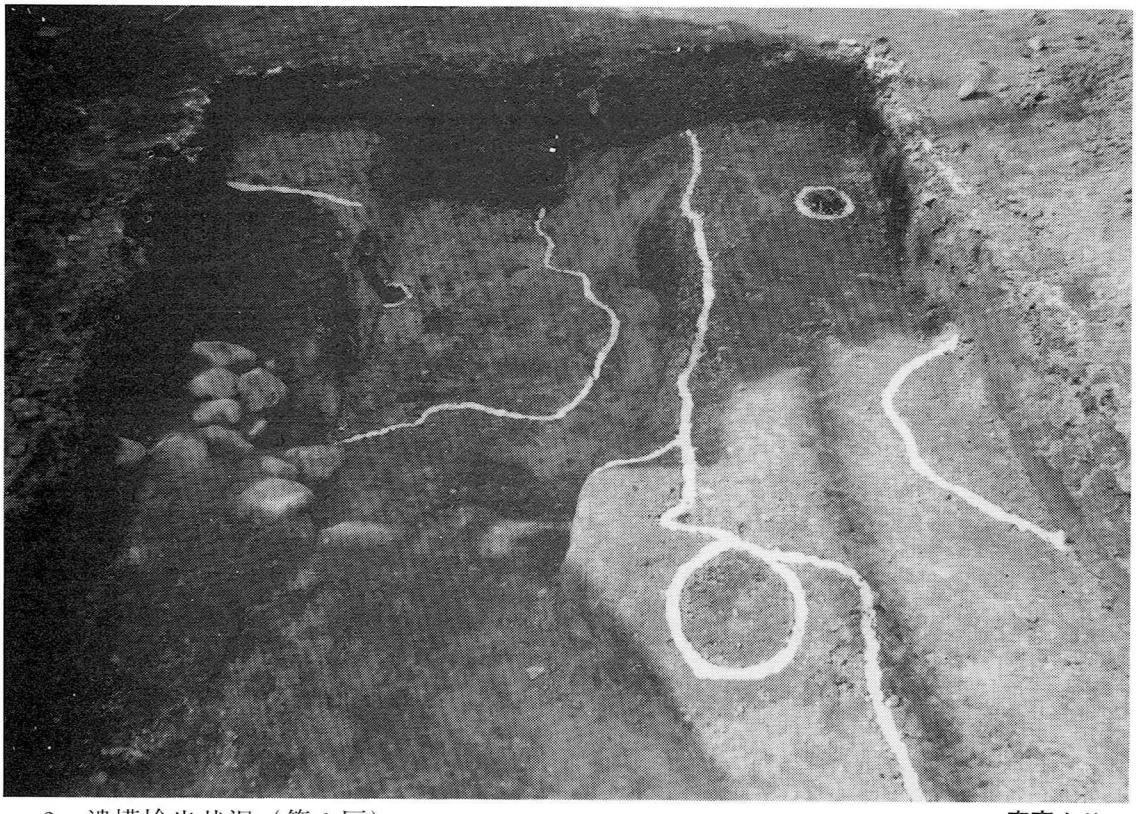
2. 同　　上　　東より

図版3　石才南遺跡

1. 遺構完掘状況　　東より

2. ＳＫ－１　土層状況　　西より

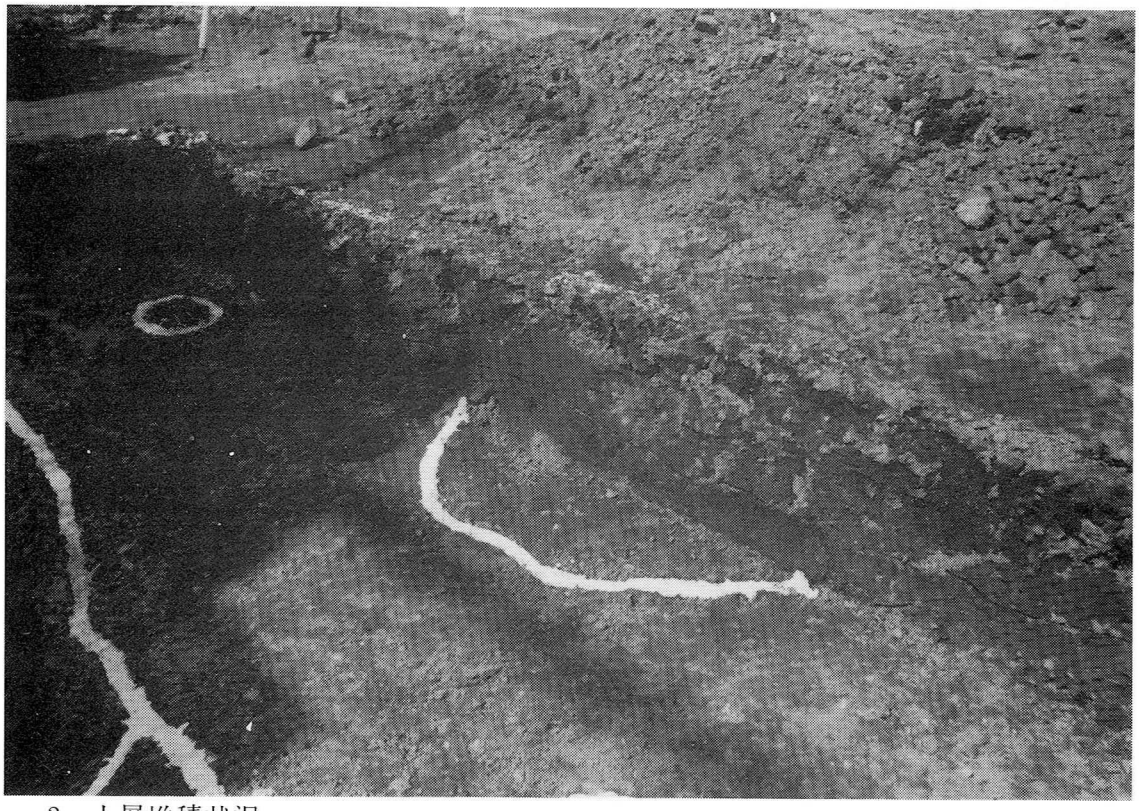
1．調査区全景（第１区）　北西より



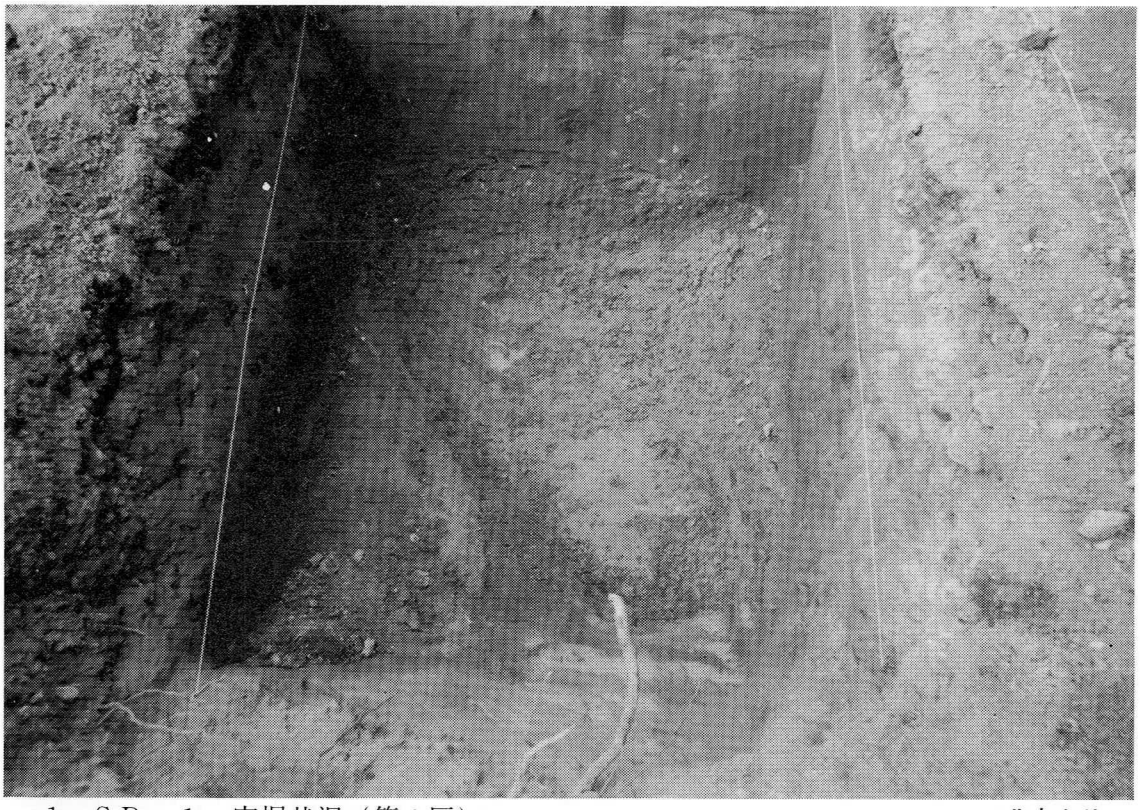
2．遺構検出状況（第１区）　南東より

図版5　貝塚寺内町遺跡

1. 遺構検出状況　　東より



2. 土層堆積状況　　南より

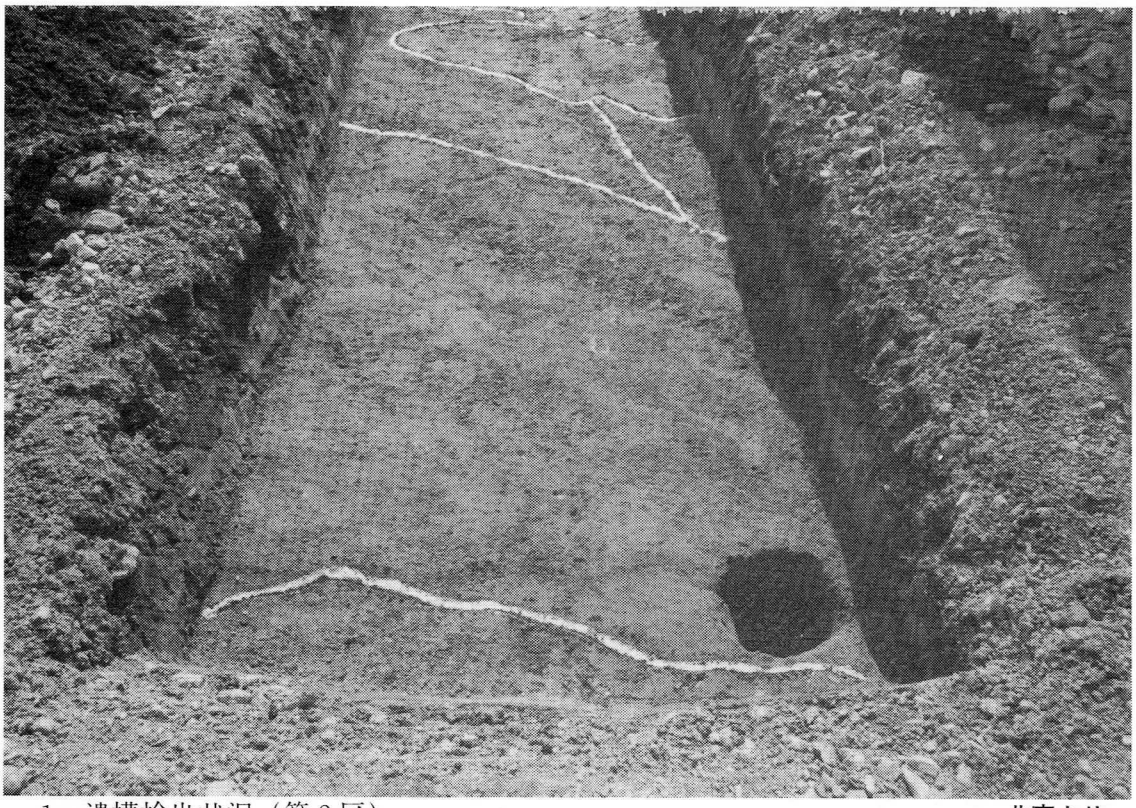


1. ＳＤ－１　完掘状況（第１区）　北東より

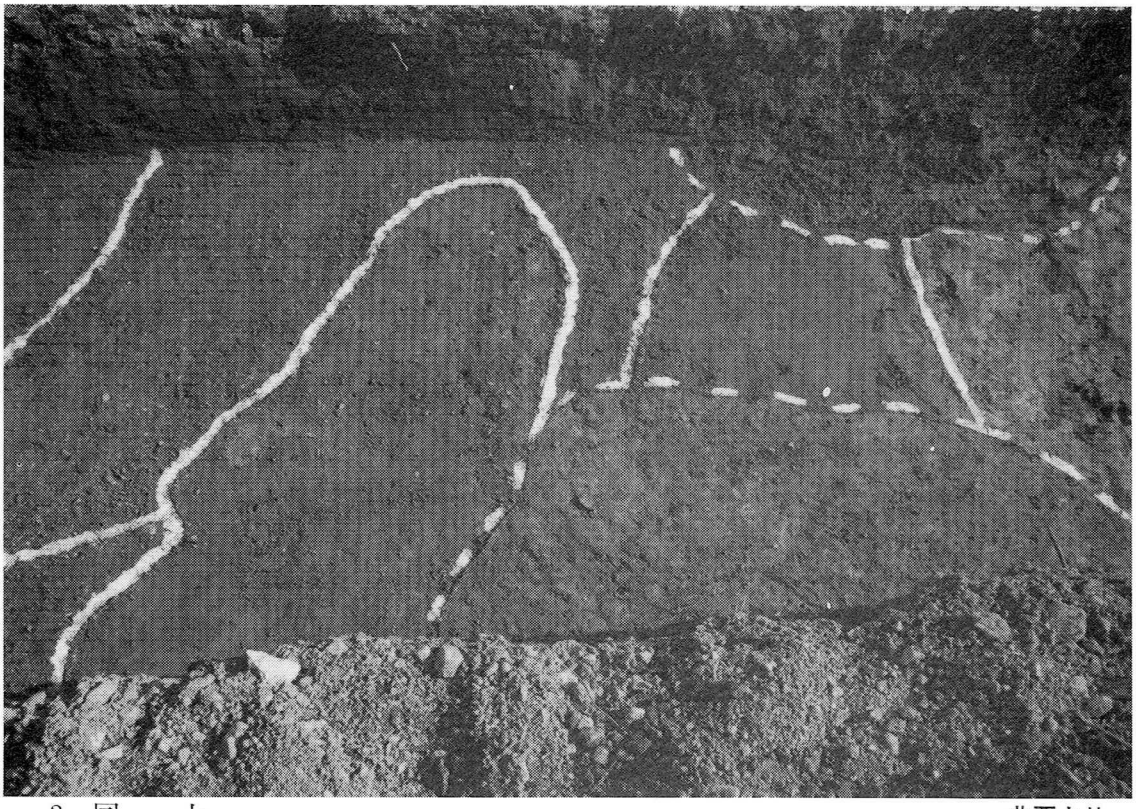
2. ＳＤ－１　断面状況　北西より

1. 調査区全景（第2区）　北東より

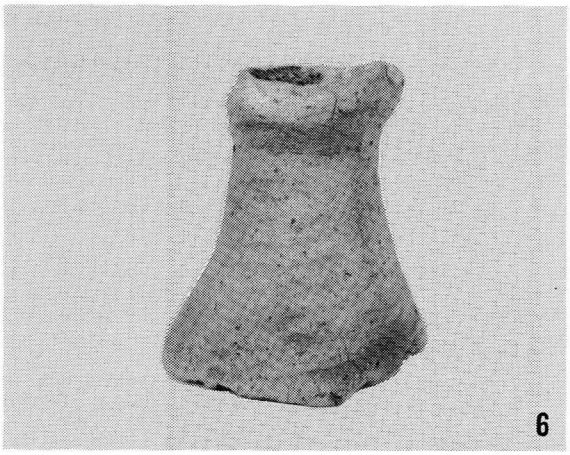
2. 同　上　南西より

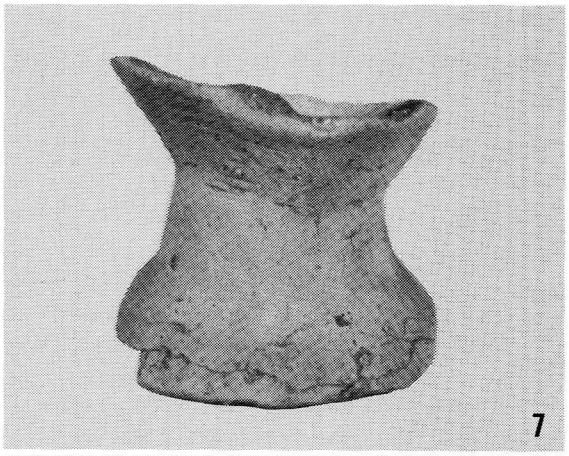


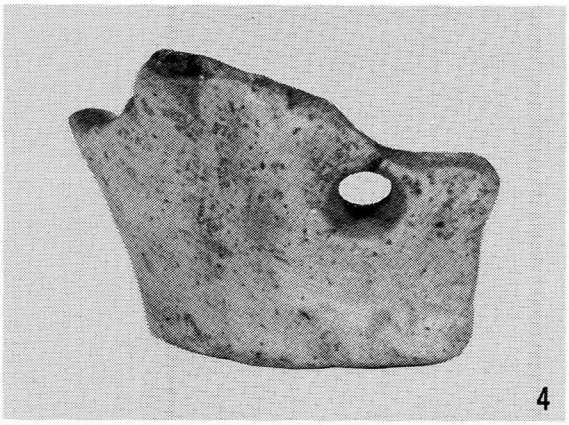
1. 遺構検出状況（第2区）　北東より

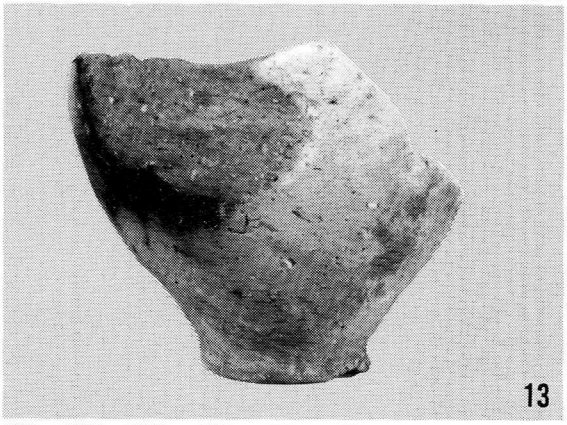


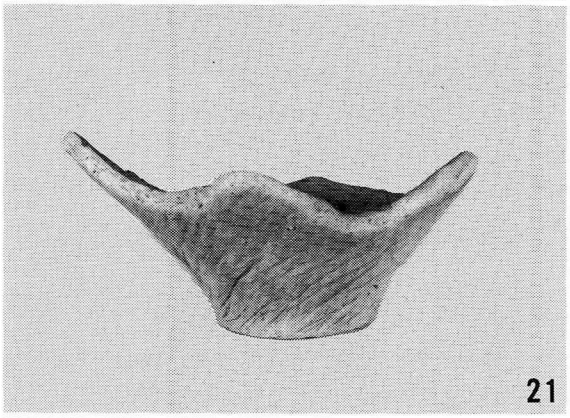
2. 同　上　北西より

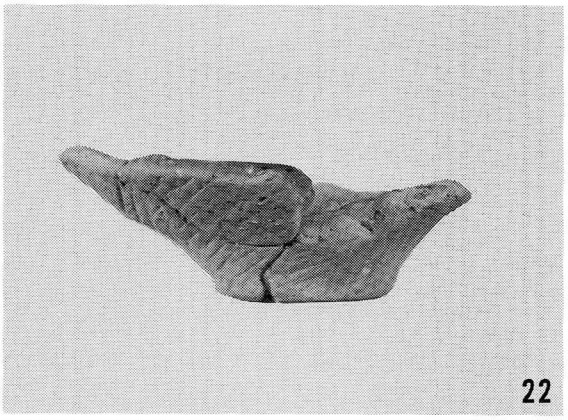


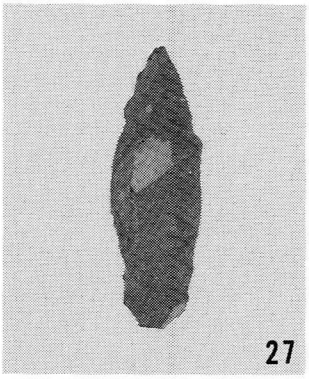


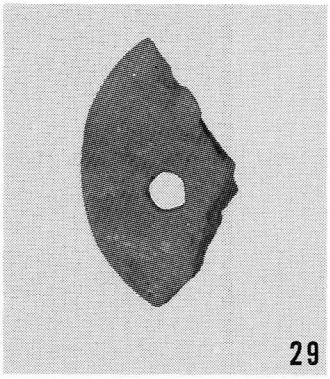


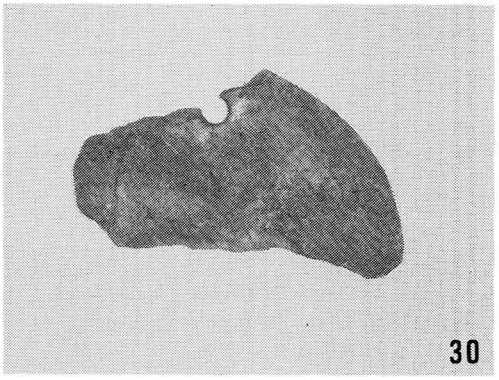












第1区　出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告第29集

貝塚市遺跡群発掘調査概要15

印　刷　　平成5年3月25日

発　行　　平成5年3月31日

編集・発行　貝塚市教育委員会

〒597 大阪府貝塚市畠中1－17－1

印　刷　　㈲山村印刷所

貝塚市近木1483－8